地学と切手

モンプレーの切手

P. Q.

1902年人類は恐しい火山活動を経験した．　一瞬のうちに　ほんのわずかの　わずか 3cm ばかりの厚さの噴出物がひとつの市の２万８千人の住民を全滅させた．それがモンプレーの活動であり　火山爆発の型としてプレー型を確立させ　さらには火山砕屑流に至るまでの火山学の認識を飛躍的に発展させた活動である．

モンプレー (Montagne Pelée) は　西インド諸島のマルチニク島にあって　ここはフランスの植民地だった．標高は約1,460m の山で長い間の休火山で　住民の記憶にある最後の噴火は　1851年のおだやかなブルカノ型の噴火だった．

1902年の春から噴火が始ったが　今度は火口からドームが成長して　いっぱいに火口をふさいだ．　このドームと火口壁との間から熱い流れがリビエル・ブランシュの谷を滑り落ちた．　住民は逃げ出そうとしたが選挙が近づいていたため総督は住民をなだめようと必死だった．後年この熱雲を観察したペレーは次のように述べている．

> 熱くて多量のガスを含み　たえずガスを放出する粉々の熔岩のたいへん重い質量のなだれ．　そのひとつひとつの粒子が隣りあった粒子から圧縮されたガスのクッションによって隔てられているために　それらの大部分はこまかく分割されており　極端に動きやすくまたほとんどまさつを伴わない．

５月８日　これらの熱雲の一番大きなのが斜面をすべり落ち　それは時速200km 以上のスピードで約7kmはなれた麓のサン・ピエール市を襲った．　この市はマルチニク島の港であり首都でもあったが　28,000人が土牢の中に閉じ込められていた１人を残して死んでしまい港では船に火がついてひっくり返り煮えたった海の中に沈んでいった．

熱雲の活動とドームの成長はそれからも続き　10月になるとほとんど固った熔岩の栓が火口から押し出されて来　半分われて突き出た岩尖（スパイン）の形となり　300m の高さに達したが　1903年の７月までにこわれてしまった．

サン・ピエールの被害は全世界に衝撃を与え　フランスは早速ラクロア (Lacroix A.) を現地に派遣した．　一方５月８日の２日前に　南のセントビンセント島のスフリエール火山も少し異なった型の熱雲の活動を行ない　死者は1600人にのぼった．　ロンドンの王立協会はアンダソン (Anderson T.) とフレー (Flett J. S.) を調査に送り　彼等は帰途にモンプレーを訪れて貴重な記録を残している．　ラクロアは報告の中ではじめて熱雲 (Nuée ardente) という言葉を使用した．

噴火の２年後にサ・ピエールの廃趾をたずねて非常に強い印象を受けた１人の旅行者がいた．　それはペレー (F. A. Perret) だった．　彼はそれまでエジソンと共同で仕事をしていた電気技術者で発明家だった．　オーバワークのため健康を害し　医者に保養の旅行をすすめられてマルチニク島にやって来た．　ひとつの都市を全滅させた火山の活動に強い印象を受けた彼は　それまで地質学にも火山学にも全然関係なかったにもかかわらず火山の研究に生涯をささげる決心をした．　早速ベスビアス観測所のマッテウィチを尋ねて奉仕を申し込んだが幸運にも1906年のベスヴィオ火山の大噴火にぶつかり彼の才能はたちまち現われてしまった．　10数年後カーネギー研究所から出版された彼の報告は火山学の教科書とされている．

1929年から32年までモンプレーは再び活発になった．ペレーはリビエラ・ブランシェの縁のところに観測所を作り　この火山の活動を注意深く観測しつづけた．　噴火は1932年まで続き　彼の報告は1935年に同じカーネギー研究所から出版され　現在でも火砕流研究の古典である．

切手は1947年マルチニーク発行３種のひとつであり山を主題としている．　20ｆは　1955年３月５日　フランスの風景切手９種のひとつとして発行されたが　さほど見映えするものでない．

今年の４月になって　スフリエール火山の噴火を一部の新聞が報じているが　詳細はさだかでない．